

授業準備を どこまですればいいか

青木栄一

Aoki Eiichi
(東北大学准教授)

小学校教師が英語教育に携わる場面が増える。小学校では英語教育の初心者が多いため、授業準備についても関心が高まっているのではないかと。ところが、実証的な調査データによれば、授業準備が必ずしも効率的に行われていない可能性が見えてくる。

授業準備にも効率性を

文部科学省の調査によれば、小学校教諭の授業準備時間は2006年度1時間9分だったものが、2016年度に1時間17分となった。授業時数の増加や教育内容の変化が背景にあると思われる。

ところで、いわゆる過労死ラインから割り出された週当たり60時間以上労働の教諭とそれ未満の教諭を比較すると、授業準備の時間が大きく異なっている。前者では1時間39分であるのに対して、後者では1時間6分である。授業に費やす時間にはそれほど差がないことから、授業準備の効率性に差があるようである。道徳教科化、プログラミング教育の推進など、英語教育にとどまらず、教育内容の変化（追加）は今後も進むかもしれない。そこで重要となるのはいかに効率的に授業準備をするかという視点である。

先ほどの調査では、担任（単式学級）をしている小学校教諭の労働時間（持ち帰り除く）は11時間27分であり、専科教員（10時間30分）、通級指導、日本語指導教員（10時間19分）と大きな違いがある。さらに、2010年時点で学級担任が「小学校英語」の授業の中心となったことがわかっている。ただでさえ忙しい学級担任が小学校英語の変化に正面から対応しなければならぬ。

だから、生真面目に授業準備をしようとすれば

無理が生じる。ある調査によれば小学校英語教育についてのイベントに参加した、つまりは熱心な教師でさえ、9割が1日1時間未満「しか」英語スキルアップに使えないと答えたという。また、少し古いだが、2011年度のある調査では教師は自身の英語指導力について自信がもてない状態だった。

授業準備で何をやるか

そこで、まずICT機器に習熟するとよい。英語教育でのICT機器利用率は96.2%と高率である。もしICT機器に不慣れな場合、授業準備を効率化できる可能性をみすみす逃すことになる。英語よりもまずはICT、と考えてみてはどうか。

日常的には、テレビやラジオの英語講座を受講すれば十分であろう。それに、高学年での英語の教科化をうけ、中・低学年での英語活動を含めた今後は一定程度の英語教育の内容の取^{しゅうりん}込が進めば、授業準備も今よりも容易になるだろう。このあたりは教科書会社や教材会社を上手に「使う」ことが肝要である。

さらに、スキルアップにはお楽しみもまた必要である。35万人の小学校教師のうち何らかの留学経験があるのは5.5%である（1か月未満がその半数程度）。同僚が協力し合って校内業務をやりくりし、ローテーションを組んで、夏休みなど長期休業中に1週間でも2週間でも海外に滞在してみてもどうか。夏休みの「働き方改革」である。日本の教師には夏休み中の給与が支払われているというメリットを活用してはどうか。まさに生き金となる。

◆参考資料

- 文部科学省（2011）「小学校外国語活動実施状況調査」
- 文部科学省（2017）「教員勤務実態調査（平成28年度）の集計（速報値）について」
- 文部科学省（2017）「教員勤務実態調査（H28）（追加集計分）」
- 文部科学省（2018）「平成29年度英語教育実施状況調査」
- イーオン（2018）「小学校の英語教育に関する教員意識調査2018」
- ベネッセ教育研究開発センター（2010）「小学校英語に関する基本調査【教員調査】報告書」